〔論　説〕

社会交変換論Ⅴ：間主体性行為ゾーン

長谷川　　博

はじめに

なんらかの「存在 - 認識 - 方法」論により，天井を張り壁を立て置く「＜世界＞内存在」は，さながらモデル・ハウス（「世界」）――これが，そのまま売買されてしまったかのような信憑化とこれに対する可疑化がある――をつくるようである。つまり，その制作材料（重要素・契機）になる諸項が際限なくなるほど，あるモデル・ハウスの内覧から外への窓扉を開けるかにして2次化を，どうやら受け入れなおす。ゆえに，いまここでは，反証主義と訣別し科学実在論に依拠する者[(1)]でも，偶然の仮面を被った必然をいう実在論とその逆をいう反実在論（相対主義，道具主義，論理経験主義，［ラディカル］構成主義など[(2)]）の間のどこに住むかはあるが，徹底できる限りのところでの包披論を展開できる。

「1と多」――万物の斉同性である神と，パラダイムから個に至る同一性としての神々――という1次の戦いだけがあったのではない。「1（多）なる多（1）」――神（神々）なる神々（神）――という2次の戦い――真っ二つにされた「綺麗事」の戦いではない現実にある入れ替わりや立ち代わりの戦い――による世界の始まりが告げられてきた。また，「無」――「自我に対応する - しない」の転倒がある通常は自然と人間の間の関係で捉える実在項も，形式と内容を持つ実体項も，格下げされていくやがて――と，後述する2様の生成変化として「有」がある。そして，「梵我一如」[(3)]は「1（多）なる多（1）」――1なる多は「n + 1」，多なる1は「n − 1」とすれば，「n ± 1」の時空――という，「空」――本論では「n ± 1」の無限にある3点動化の自由運動――は「無（有）なる有（無）」という，2次オーダー（対称性や排中律の破れという未だ排去できない標準論理での矛盾）に入っている。

よって本稿は，「理論 - 実践」にある「専門 - 教養」，「分析 - 総合」，「自然化 - 反自然化」のドグマ[(4)]からの転回を［{（～へ）から} さらに］と言及し，たとえば「高品質 - 低品質」／「高価格 - 低価格」の交差経験領域において誰しもが唱道した二律背反の同時実現も摂然化する概念スキーム[(5)]の基本線を言及する。以下も脱パラドクス化し，1や2や多の陥穽に極まらず，百回つくうちで一番長く続いた嘘とまでいわれた暫定的信憑から転

(1)　阿部周造，2013年，69 ～ 87頁。たとえば以上がある。

(2)　D. デイヴィドソン／清塚邦彦ほか訳，2007年，120 ～ 142頁。反実在論については以上を参看されたい。

(3)　E. シュレーディンガー／岡小天・鎮目恭夫訳，2008年，171 ～ 201頁。

(4)　1次区分上，「専門 - 教養」は，知のアソートメントにあるカテゴリと前提了解を「問わない - 問う」知悉である。また，「分析 - 総合」とは，「言語をみるか - それ以外も見るか」にある知悉である。このときにいっている言語については，以下を参看されたい。Ch. W. モリス／内田種臣・小林昭世訳，1988年，58 ～ 64頁。分析と総合については以下を参看されたい。W. V. O. クワイン／飯田隆訳，1992年，31 ～ 70頁。

(5)　D. デイヴィドソン／野本和幸ほか訳，1991年，192 ～ 213頁。以上の冒頭で言及された概念スキームへの懐疑に対し，それでもある仕種として本論のものがある。

回を残せるように。①自己言及（自己同一性，自律性，個体性，みずからによる全体限定的な境界決定・準拠・参照）にある自己表現パラドクス，②インプットもアウトプットもないというAPSパラドクス，③帰謬・背理法の非妥当という「線形 - 非線形」パラドクス，そして④「環 - 界」パラドクス――後稿で言及する――。

以降では，「A - B」／「A - B」という2次化を「A - B」$_2$と，その1次オーダー（クラス$_1$ともいう）にある「A（B）なるA（B）」を「A$_1$（B$_1$）」と，その2次オーダー（クラス$_2$ともいう）にある「B（A）なるA（B）」を「A$_2$（B$_2$）」と表記する。

第1節　4転回以後

問題意識化したことで脈々となる承前の「系統」――諸系列と諸文脈がある――上ですら通用する「存在 - 認識 - 方法」論を考えるとき，［分岐］論理階型論[(6)]との折り合い，「自己言及 - 他己言及」との向き合いを前にして，まずは「同一 - 差異」／「肯定 - 否定」／「対応 - 整合」から述べよう。

「同一 - 差異」は，「肯定 - 否定」がいわれる大いなる契機である。「同一 - 差異」$_2$は，つぎをだす。ただし，以下のメタファーにも，ものはいいようの別様がある程度はあっていい。①「蛙の子は蛙」といえる「同一［から］の同一」，②「東は東，西は西」といえる「差異［から］の差異」，そして③「鳶（鷹）が鷹（鳶）を生む」や「他人の空似」といえる「同一（差異）［から］の差異（同一）」。以上にかかわり，心が組み込まれた肉体である「身体」という脱構築的な課題[(7)]に取り組むマーケティングにとっても馴染みな，生命や精神（心脳）に降りた物理学がいう丁度可知差異がある。

「肯定 - 否定」$_2$は，つぎをだす。①構造維持過程で「垂直 - 水平」的相互作用がなく「肯定的意味を肯定」し切って担う「超越［論］的内包」――みえなくなるが偏在する「1」（単数）なる実在――，②構造発生変動過程での「垂直 - 水平」的相互作用にある「還元 - 創発」の矛盾を囲み「否定的意味の否定」を可能とする「内包的外延／外延的内包」――現実の現象を眼前にした未熟／成熟な「機能／構造」上でみえるようになる局在する半実在（モノのコト化，コトのモノ化という担架体）――，そして③担った肯定（否定）的意味の否定（肯定）を可能とする「弱い内包（強い外延）」――特定的な「認識 - 存在」に過ぎない人間には，通用してきた合理／経験が通用しない世界があればその逆の世界もある――。

こうして担うことが，言語者であり，解釈者であり，内観を訴える行為者であることから，活動の方法化となっていく。彼らは，遊園地の最新式メリーゴーラウンドに乗ってきた大人たちから育つ子供たちである。その大人たちのかつて同様に，その子供たちは，最新式テーマパークの絶叫マシーンに乗っては嬉々としている。ただし，ノイラート船の乗り換えをいう異説とアルキメデス支点が船窓外にはないという異説の2重性も帯びながら，いずれに，なにかを乗り継いだ（ぐ）者である。その彼らは，プレ（ポスト）なるポスト（プレ）であるからこそ，その意識[(8)]には，［新］古典やら最新版やらの語彙を纏う「コード／

(6)　B. ラッセル／高村夏輝訳，2007年，156- ～ 185頁。A. N. ホワイトヘッド・B. ラッセル／岡本賢吾ほか訳，1988年，127 ～ 207頁。

(7)　F. ヴァレラほか／田中靖夫訳，2001年，210 ～ 304頁。以上を先駆とする一派だけではない。

(8)　D. チャーマーズ／林一訳，2001年，127 ～ 162頁。彼は，心身同一説論者である。

概念」化やら，この垂直／水平移動がある軌道を脱した形式化できない心脳寄りの暗黙知（直観）や身体寄りの暗黙感（直感）が想定されてきた。

そうこうあるうちで，「自然 - 人間」の区分――区分（確定記述による存在化）に終わることがなければ生成化があり，そうした区分をやめることはない――があり，物理学者という人間が涙をこぼす「自然がまるで自然を語ったかのような言語」と，「人間がまるで人間を語ったかのような言語」が，相対化されて久しい。このように相対化があるとはいっても，必然の真への期待に過ぎないといわれた対応説（1元論）か偶然の真それ以上ではないと「厳密」論証された整合説（多元論）かの乗り越えが複雑系論を経て仄見えて以来，混在してきた両説が干渉し合い，他説にある擬制（みなし）を自説に還元しようと牽制し合っている。ともあれ，1元論と多（2≦n）元論という大きな2元論や，その中の小さなあれこれの2元論を，科学的に解体しようとする再定式化ずくめであった。

「存在論／認識論」の，前者に「実在論 - 観念論（記号論）」（換言すれば「対象に従って生まれる認識 - 認識に従ってその知覚範囲内で対象が生じる」）を，その後者に「合理論 - 経験論（⊃感覚論）」（「超越的ではない超越論的な知性 - 実験や観察からそう呼んでいい知性」）を入れたつぎの各カテゴリ（再区分）に，つぎの諸論が同定できる。①「合理 - 実在」カテゴリの広義実在論（科学実在論と反実在論），②「合理 - 観念」カテゴリの非実在論（社会構成論），③「経験――実在」カテゴリの関係論（構造論），④「経験 - 観念」カテゴリの現象論。ただし，それこそのかつてにカントによって合理論と経験論の止揚がいわれたことに対する脱構築から，実在論と観念論の脱構築もいわれるに及ぶ。本論の認識論に親和的な科学実在論にしても，すでにそうである。

「同一 - 差異」／「肯定 - 否定」は，上記の渦中にある。クローバル化するほどに，外部消滅とこれによる内部消滅や内外相関不利への懐疑が一方でいわれるや，この懐疑が飛び火したかのような「残留かファーストか」という現象をまたも呈した。従前からグローカル――その内部で選択可能な意味が構成される地域とこれを制約する外域が相互に「構成 - 制約」の反照場であること――や，ハイパー・コンペティション――「競争 - 協調」／「リアル - フィクション」においていずれがより大きな構造なのかというプリミティブ性を考えるに至ること――がいわれた。バーチャルでも身体性イメージが湧くほどリアル視されるので，過剰反応やその拡大につながることがある。そして，こうした現実の渦（たとえばハイパー・リアル[9]）についての，［位相］モデルといってもいい図が，地――「経験に希薄な物理 - ［非］日常 - 経験に濃厚な現象」という現前のスペクトラム――に先行し，その図が地を生み出し，地を凌駕しているのではないかという問いが忌避できなくなっている[10]。

古くて新しいこれらとの漸次呼応である上記の「対応 - 整合」には，まずはつぎの4転回が方法論的にもあった。①観念論を言語（記号）により科学化しようとする自然化である「言語（記号）へ」，②上記①によっても2元論の罠に連れ戻されるならば文脈吟味により逆に言葉も判明するとした往時標準の科学的解釈のもとでいう自然化である「行動へ」，③真理に接近する可能性を科学的方法とは別の仕方で追究する反自然化である「解釈へ」，

(9) J. ボードリヤール／竹原あき子訳，1984年，1～56頁。

(10) M. メルロ＝ポンティ／滝浦静雄・木田元訳，1964年，193～274頁。図と地の構造については以上を参看されたい。

そして④上記それぞれに構造微分論法[11]のような縮退もあるといい内的視点を問題化する「行為へ」――上記①に対しては「実践としての戦略論」(SAP) を包含する「実践としての理論」(TAP) がいわれ，②に対しては反自然化となり，③に対しては自然化となる――。つまり，これら4転回には，「自然化 - 反自然化」$_2$により絞り込める相違がある。

言語，映像，音響，その他のかたちをとる記号（サイン）は，物理的感覚から得られる環境要素に対する外部知覚野のシグナルと，環境要素抜きでも現実を処理することすらできる内部表象野のシンボルに区分されてきた。シンボルを扱う記号学説上でも「単一体的な未分化 - 反復体的な分化」の桎梏は根深いが[12]，つぎの提唱がある。①決定論的な記号学と非決定論的な記号論，②上記①の後者の流れを受け継ぐ生命記号論[13]が内包していた2次化Ⅰをいうネオ記号論と2次化Ⅱをいうネオ・ネオ記号論。この期でキーワードとなるのは，F. ソシュールの「ラング - パロール」[14]に対応するC. S. パースの後述する「タイプ - トークン」である。両者にある「決定論 - 非決定論」上での意味の「ズレ - 反転」[15]は，つぎの2次化にある。すなわち，パース流にいえば「始・起（⊃1次［性］）- 過程（⊃2次［性］）- 終（⊃3次［性］）」[16]において「見えない境界」が設定されるまでの間での，「双対 - 非双対」／「相補 - 非相補」にある「排他 - 両立」を，「走り続ける - 足踏みする」$_2$だと，ひとまずいおう。

そしてこの途上で，語用論的「共示一般」や意味論的「外示一般」を追究する「言語へ」が，［実在］定義上で意味の2元化に連れ戻されるならばとして「言語へから」（観念論の科学化に収まらない記号論化）というように踵を返された。たとえば，「ちょっと3階へ」という発話に対し，この外示的意味を受け取る者には「何をしに3階へ行くのか」という思いが残り，この共示的意味を受け取れる者には「きっと，～だろう」という思いが生じる[17]。そして，「コード - 概念」$_2$からでるつぎのうちの③が前面化した。①「語用論的共示一般」（コードなるコード），②「意味論的外示一般」（概念なる概念），そして③「語用論的共示一般かつ意味論的外示一般」（コードなる概念，概念なるコード）。

また，理解不可能な言葉や出来事を理解可能なようにコミュニケートする「解釈へから」では，能記の再生産と所記上のズレを残しつつ，超越論（制限合理の強化可能論）的な所記はあっても，ある信念体系からその資格を奪うような超越（完全合理）的な所記をだす釈

---

(11) Korzybski, A., 1995, pp. 386-411.

(12) R. ローティ／野家啓一監訳，1993年，325～338頁。以上では，S. A. クリプキとG. フレーゲを引用し言及している。

(13) J. ホフマイヤー／松野孝一郎・高原美規訳，1999年，147～158頁。

(14) ヒトの言語［潜在的能力］であるランガージュは，別言語共同体で用いられる多種多様な顕在的制度としての国語体であるラングと，ランガージュを実現するための一般能力の行使であり個人思想に基づいたラングのコードの個人的行使であるパロールに区分される。丸山圭三郎，1981年，74～177頁。以上に基づく。

(15) たとえば，制度と行為にあるラングとパロールの反転。千葉県と成田市にあるタイプとトークンの反転。かててくわえて，ラングがトークンに，パロールがタイプに対応するような置換が生じているという変化への気づきがもとでのニヒリズムがある。この気づきに違和感あれば消極ニヒリズム，違和感なければ積極ニヒリズムといえる。いつか蓋が開いたとき跪ずく猫にあてはまるのは，シニシズム。

(16) C. パース／内田種臣編訳，1986年，89～106頁。本論でいう1次，2次とは異なる。

(17) 語用論的共示一般とは表出者と翻案者間の送受信文脈・コミュニケーション時空で整合的な「自己 - 他己」という「表出 - 翻案」系であり，意味論的外示一般とは共示一般が圧縮された指示系である。
R. バルト／渡辺淳・沢村昂一訳，1971年，195～201頁。以上に基づく。

技があるというのは傲慢であるとなった。そして,「行為へから」では，習慣［変化］や行動主義言語を自家薬籠中のものとした行動型だけでなくその影響を探究するが[18]，そこにおける機能主義問題[19]が惹起された。

境界を確定的に画定する2元論を通過した2次化では,「行為は意思決定の一部かその逆か」というようにいい方はいくつかある。たとえば，［｛(組織 - 戦略[20]) - 市場｝- 段階がある環境］にあった論にしても，境界画定が不定な「分化と未分化の両義性」というデマケーション問題への注意の払い方として，因果論では語りきれない「間主体性」(「間主観 - 間身体性」[21]に基づく操作者性）への問いになっていた。そしてこれが，ポスト4転回（「～へから」）――心理学的行動主義なども単に前前段落の②ではすでにない――を再び関心集合化し，ポスト・ポスト4転回（「～へからさらに」）として3方向に展開する。

さてして，再現（図）上とも現前（地）上ともつかない，生物学的系統区分,「マクロ - ミクロ」，そして「品種 - 品目」といってもその境界に食い込むように接し剔抉している「タイプ（「認識内部で再現された一般」- トークン（外部の現前である個物」）」$_2$だといえる「SLMS化[22]」（システム化，抽象化，モデル化，構造化）は，言語領域における「コード - 概念」の再参入区分になる（図1)。

以下が，この領域の根本についての先端である。外示化する概念内包と共示化するコード所記が絡んでいるといえるが，すなわち，2次（科学探究内包）と1次（日常文脈内包）から，0次内包とマイナス内包がいわれ4項化し，そしてこれらのいずれでもない残余として無内包がいわれたことによる論争[23]である。そこでの0次に「非日常文脈」，マイナスに「哲学探究」という能記以上にあてはまる能記がなければ閉文化できることになり，つぎのようにつめてまとめられる。つまり,「非日常文脈内包 - 日常文脈内包」$_2$を種に,「哲学探究内包 - 非日常文脈内包」$_2$,「日常文脈内包 - 科学探究内包」$_2$，そして「日常文脈内包 -

図1　システム化，抽象化，モデル化，構造化

<table>
<tr><td colspan="3" rowspan="3"></td><td colspan="4">コード</td></tr>
<tr><td colspan="2">能記といえるタイプ</td><td colspan="2">所記といえるトークン</td></tr>
<tr><td>弱</td><td>強</td><td>弱</td><td>強</td></tr>
<tr><td rowspan="4">概念</td><td rowspan="2">内包といえるタイプ</td><td>弱</td><td colspan="2" rowspan="2">抽象化</td><td colspan="2" rowspan="2">モデル化</td></tr>
<tr><td>強</td></tr>
<tr><td rowspan="2">外延といえるトークン</td><td>弱</td><td colspan="2" rowspan="2">構造化</td><td colspan="2" rowspan="2">システム化</td></tr>
<tr><td>強</td></tr>
</table>

(18) 中性1元論は行動主義と連携している。B. ラッセル／高村夏輝訳，2007年，88頁。
(19) A. セン／鈴村興太郎訳，1988年，41～96頁。A. セン／池本幸生訳，2011年，327～452頁。
(20) Chandler, A. D., 1962. Ansoff, H., 1978. 前者が「戦略は組織に従う」というときの組織は組織構造であり，後者がその逆をいうときの組織は組織能力であるが，以上は，組織と戦略のいずれがいずれに従うかの発端になった。このことが延長できるここでいう系列／文脈は，系統内の様々な系列／文脈のひとつである。
(21) D. デイヴィッドソン／清塚邦彦ほか訳，2007年，35～71頁。以上に基づく。
(22) Floridi, L., 2004, pp. 219-253.
(23) 永井均ほか，2010年，5～113頁，250～310頁。

科学探究内包」／「哲学探究内包 - 非日常文脈内包」という展開が生じた4項2次化になっているまでである。ただし，いずれの展開においても，強弱（後述の「書き換えられた等式」での優先，非優先）がでるところでは，それがでないところに比べ弱内包（弱所記）となり，強外延（強能記）という浮遊化を伴い，意味の「ズレからの捻れ」を起こす。ゆえに，これら4項のいずれでもないものが，4項2次化の昇降先として無内包（直観，直感）といわれた。この無内包は，4項2次化が下手にそれ以上のn項2次化（2次化Ⅲを超えて2次化Ⅳ）になるよりいいならば，意味のズレからの捻じれが保持される螺旋をイメージ化させるかなりの方便である。

また，現在が完了形現在や進行形現在になる便法が抜き差しならないが，解釈領域や行為領域でも，［間］身体性とのかかわりで以下までのことが，命題的態度とつながりをもつようになっている。①論理空間中の三角測量[24]による解釈の暇なく湧き起こる「デジャヴ（初体験を既体験と知覚する時間錯誤の自覚）- ジャメヴ（既体験を初体験と知覚する時間錯誤の自覚）」，②実践が随伴する行為を暇なく誘発をさせる「スティグマジー（外が内に入ったと知覚する空間錯誤の自覚）- アフォーダンス（外に内が入ったと知覚する空間錯誤の自覚）」。いくら特異点を超えるようにつくっても，そのAIだけではロボットはうまく動かない。身体性とは，「5感入力系 - 『声は意識である[25]』というなどの運動出力系」の裂目にある論理系のフル回転を節約するように埋める非論理系である[26]。「自己 - 他己」で言われていた「情報の対称化と非対称化」は，考え過ぎても動き過ぎても（考えないのも動かないのも）いけない一個の「考系 - 動系」にあることの延長だといっていい。こういうところにある「モノ（コト）のコト（モノ）化」に，情報は実在している。文化に根づく後述する意味や価値の判断などの認知・認識は，それは共通了解が得にくい。しかし，感覚から得た環境に対する意識である知覚の身体性，さらに感覚の生理的身体性では共通了解がかなり高く得やすい――身体性が「間」であることからの類化――からである。さらに，主観的質感覚であるクオリア――主観的量感覚を今は問わないことにする――，そして利き手性であるデクステリティは，つぎのように位置づけられる。まず，「対象・操作相関項として分かる個々の要素・行為機能 - 全体性として分かる個々の要素間のコミュニケーション行為などの関係」／「コト（出来事系列）が流れ淀む時間 - モノ（事物）が出入りする空間」を，「A - B」／「C - D」と置く。このとき，集合論的にいえば，ジャメヴはAかつC，デジャヴはBかつC，スティグマジーはAかつD，アフォーダンスはBかつDである。そして，クオリアはジャメヴかつデジャヴであり，デクステリティはスティグマジーかつアフォーダンスである。

ともあれ，われわれが志向する対象についての，「システム化→抽象化→モデル化→構造化」という前後関係がある「4化」間で原理的に延々と続く更新循環は断章するものである。われわれ自体は，「ホロン（［変容］1元的な投機的同一体）- クリナメン（接続が現実化している多元的関係体）- プラトー（可能な接続を延期している自由変更体）」という3点（項）動化が2次オーダーで作用する全体（可能性の幅と強さに関する情報を背負う態度・状態

(24) D. デイヴィッドソン／清塚邦彦ほか訳，2007年，143～198頁。

(25) J. デリダ／林好雄訳，2005年，177頁。

(26) R. ファイファー・J. ボンガード／細田耕・石黒章夫訳，2007年。以上は，脳が身体を制御するという古典的見方を突き崩す。また，センサ - モータ協調として，アフォーダンスに言及している。

ベクトル）である。その断章は，それら3項のいずれかに［最適化を経て］縮退した時ばかりとは限らないが，縮退したことにより他の可能性が消えるか消えないか（相補性を見ないか見るか）の解釈の相違がある。このことは，理論パラダイム記号間の交換・置換・共訳の「可能 - 不可能・独立」――すべてが真に独立ならば2次化は無用であり，多元化するばかり――に，むろん関係する。

つまり，既述の4化を通過し，間主体性は「言語 - 解釈 - 行為」の系列各項がそれらの2次化Ⅱの全体に共属しているといいはじめることが，先ほど来の「～へからさらに」なのである。このとき，言語へからさらに，解釈へからさらに，そして行為へからさらにと，いずれでいおうともやはり偶有性（多様性の中の揺動性）がある。これは，言語が言語の，解釈が解釈の，そして行為が行為の表象になることへの根本懐疑が拭えなくとも，いずれかをプリミティブ視することによる相違としかいいようがない。ところが，「言語 - 解釈 - 行為」系列での2次化Ⅱである「これこれ」にも，他のさまざまな系列の2次化ⅠからⅢまでの「しかじか」が再参入し，推論に推論がいつのまにか超越論的に最小限に重ねられるのは妨げられない。

その前にSLMS化の解を生むには，「言語 - 解釈 - 行為」系列に，後述する「意味 - 価値 - 評価」の系列を再参入させるか，これら2系列を相互的に再参入させる。再参入は，これを表現する等式[27]が，A = {A ／～ A} と書き換えられた[28]のではあった。ここからの続きは後述するが，このことから，つぎのようにいえる。選択領域が自己（他己）言及的方法で構成されるときに，相互に否定的な関係にある2項的な区分の一方は2項の全体に対して優先（代表）され他方はそうはならないが，「妥当／許容性」とは前者の項の性格だということである。

行為やその対象の意味とは，よって通常にはまずは，「妥当／許容可能」な［習慣的］同一性である。ただし，心の中にのみある境界（外部に差異を見出す差異としての情報を確立すること）が意味の根本を形成することで区分が行われる。ただし，その内外にある見えない区分が見えることでのフレーム問題と参照フレーム問題の混同を避ける必要がある。これは，「フレーム-参照フレーム」$_2$を考えさせることになる。そして，この意味に付与された，ある組における弱順序[29]（反射律，連結律，推移律を満たす順序）での順位は，価値である。価値は，等価的ならば他の組の価値と交換可能であり，外の価値と内の価値は相互作用する。社会は，1つの目的を決められなくとも交換を始める間社会である。また，行為的価値と制度的価値は，多対1の関係において相互に部分的に変換可能である。このことも含み，価値は，これこれに区分され，そこへ2次化Ⅳに向かうかのように，しかじかの区分が再参入されてきた[30]。

それぞれに対生成の関係がある「自己 - 他己」，「内部 - 外部」，「部分 - 全体」といった区分も，n ± 1や，空への，問いを一歩進めたかの再参入区分とみなせる。ただし一方で，これこれの2次化Ⅰの2項（表頭と表側）が摺りかえられるか，忘却されたかのように背面化し再参入区分だけが独り歩きすることはある。また，そのすべての区分の場合に，異な

(27) G. スペンサー＝ブラウン／山口昌哉監訳，1987年。
(28) 大澤真幸，1994年，320 ～ 324頁，330 ～ 332頁。
(29) K. J. アロー／長名寛明訳，2013年，13 ～ 29頁。佐伯胖，1980年，65 ～ 66頁。
(30) 廣松渉，1993年，5 ～ 80頁。以上が参看されてきた。

る誰か（観察論者）による再区分が適しているというわけではない。生命を非常に機械的であるといって済む領野ならば，確かにそれは適さない。

記述や評価のための観測視点にはつぎがある。①観察者が観察対象に含まれているという意味で内在的――単なる世界内存在という意味ではない――な内部観測視点，②観察者が観察対象に含まれていないという意味で外在的な外部観測視点。このとき，①が②の存在を仮定する，②が①の存在を仮定する，ということに対し，①と②が相互に存在を仮定し合うという捉え方がある。そして，この第3の捉え方から，マクロになるほどの内部観測視点の，ミクロになるほどの外部観測視点の優位化の解体がいわれる。これは，「自然 - 反自然」化の相互限界の中での反照的な程度問題である。この程度問題を不渡手形になる寝言だとはいわず，内部観測視点と外部観測視点の2次化を受け入れることは，後述の意味での複雑系論後の「組織（システム） - 環境」論の発展に深いつながりをもつ。

後述する論理$_1$に対する論理$_2$にかかわる有力な捉え方のひとつに，媒介項を設けるか設けないかと拘泥せず，すべてが中間領域であるとする擬制がある。そして，ここから，「実在 - 反実在」のバウンス――実在を認識と存在のいずれに基礎づけるのかがもはや桎梏とはならない――をいうようになる。「認識せず出力し存在せず入力する - 出力せず認識し入力せず存在する」にある「認識と存在のなさ - 入力と出力のなさ」は，すなわち「遅滞のままの休止」といっていいことである。これが，過去と未来を剔抉する現在・瞬間という「いまここ」にあるわれわれの生成変化の起源（バン）であり，後述する「自己 - 他己」（2者である1者）である［1.5元論からの］われわれの「世界」制作（ポイエーシス）には，長中短期に区切られる時間長を問わずいつでもある。

さていまここで，われわれは，世界内存在である「自己 - 他己」を，つぎのどれもの対生成かつ同時現前であるとする。それはすなわち，「垂直（階層）化 - 水平化」／「単数（個性）化 - 複数（社会）化」の2系列4系からでる4性の「自己 - 他己」である。この4性の「自己 - 他己」は，相互に独立しない。なぜならば，「即自（客体側への経験の超越） - 対他を経た対自（主体側への経験の超越） - 即自かつ対自」という理解での考えにも垣間見るが，4性の「自己 - 他己」のいずれにも「規範（価値の事実化）の理念化 - 理念（事実の価値化）の規範化」[31]が，無形社会基盤・選択螺旋における審級・超越的メッセージとなっているからである。そして，ひとつの欠落もなく，この4性の「自己 - 他己」に向き合うということは，メタファーに過ぎないのではなく，ミラーニューロン・システム[32]をいまは有望な論拠とする。ただし，［組織モデル化の］方法上では，4性の「自己 - 他己」の対生成（同時現前）である間主体の複数性に対し，「先天 - 後天」という意味を消去しなければならない「アプリオリ - アポステリオリ」の処理として，またまさしくその対生成のタイムラグへの対処として，改めて同期化するか非同期化するかが問われる。

というのは，そもそも要素間の相互融解は，「完了形 - 進行形」／「不確実性 - 多様性」を共同体の限界を超えて考える組織にとっては，両刃の剣だからである。そして，「完了形 - 進行形」には統語論的時制におそらく支配された（まさしく規約に順応した）客観的時間と先にみた主観的時間があり，「不確実性 - 多様性」には恩讐を彼方にした要素の脱出や侵

(31) H. パトナム／藤田晋吾・中村正利訳，2006年。以上は，事実と価値の2分法の崩れをいう。これは，規範と理念の2分法にも波及するが，n ± 1と親和的である。

(32) Rizzolatti, G., 2004, pp. 169-192.

入が原理的に解決不可能であるという，組織境界の「限定 - 無限定」性が同一視できないレベルであるからである。ここに，「意味 - 価値 - 評価」の取り沙汰がある。

以上を縮減するために，間主体は，制度情報や目的情報など何らかの「権利 - 義務」情報を判断基準として，「言葉の止滅がない空 - 言葉が止滅した空」（心理学でもいう「生を幾度も死ぬ全う - 一度限りの死を生きる回避」）からの「協働 - 競働」／「組織対内 - 組織対外」を，「自由 - 責任」へのコミットメントとして選択する。制度とは，任意主体にとって学習することの「妥当／許容性」が確立的に認められた，正の外部性を担保できているシステム間ネットワーク，「公式／非公式」な規範や理念，ベストだとしてベンチマークされる実践や理論パラダイムの全体である。社会科学に介入する目的とは，環境にも自己にも他己にも上昇下降できる（がある）ある段階でなされる三角測量から構造微分のようにシステムに内在化していくものである。したがって，目的（あるいは目標）が，「剰余がある - ない」／「安定 - 定向 - 分岐」からつくり上げられる「意味 - 価値 - 評価」システムにいつでも先立つとはいえない。むろん，目的が多である場合は意味順序に必然性はない（不完全性定理の妥当）が，目的が1つである場合には意味順序には必然性がある（不完全性定理の非妥当）。また，「リーダー - フォロワー」という「自己 - 他己」により「目的 - 手段」がつくられるとき，それらは「管理 - 作業」／「意思決定 - 行為」の交差領域のそれぞれにおいて「戦略 - 戦術的」／「計画 - 創発的」に策定され，ともかくも「進化論的選択主義／構造論的付加主義」により選択されたものが実現される。ただし，「能動 - 受動」$_2$をいってもいえることだが，そのクラス$_1$に入る「リーダー$_1$ - フォロワー$_1$」には「自己言及$_1$ - 他己言及$_1$」の閉じた反復が，そのクラス$_2$に入る「リーダー$_2$ - フォロワー$_2$」には「自己言及$_2$ - 他己言及$_2$」のより開いた反復がある。

なおかつ，「リーダー - フォロワー」により，構造と過程の「階層的連関における相対性」――目的と手段についてもいえること――に起因する「信憑化 - 可疑化」へのガバナンスが講じられる。また，不確実性縮減の制度（規約など）に対するだけではなく多様性プール化に対するものである「コンプライアンス」とは，「樹木状階層／リゾーム性[33]」に由来し「論理$_1$／論理$_2$」におけるものとなるつぎへの柔軟性である。①制度上あるいは他の場をまたがない場上の妥当性，②単数ないし複数の目的上の許容性，そして③可能性の探求性。ガバナンスには，これらが求心因あるいは逆の遠心因としてかかわりこんでいる。そして，不可能（可能）が可能（不可能）になるほど制度変化を招きながらも，ガバナンスでは，要素の同期化を前提とするAPS化，非同期化をくり込んだ自己組織化を，レベルの異なる整合と斉合として考えるようになる。決定論に非決定論をくり込んだように。しかも，一人一人の思いはその一人のものではないとして，では先など，2つの反復をどうするのかと。

第2節　関係／関係性の論理

クラス$_1$とクラス$_2$の論理の相互非還元性に由来することが何もないとは，哲学，科学，そして学問（言語表現型芸術を含み）の最先端においてすら，誰もいいえていない。それらの論理とは，前節までで分かるように「主客 - 自他 - 内外」／「縦横（垂直，水平）- 遠

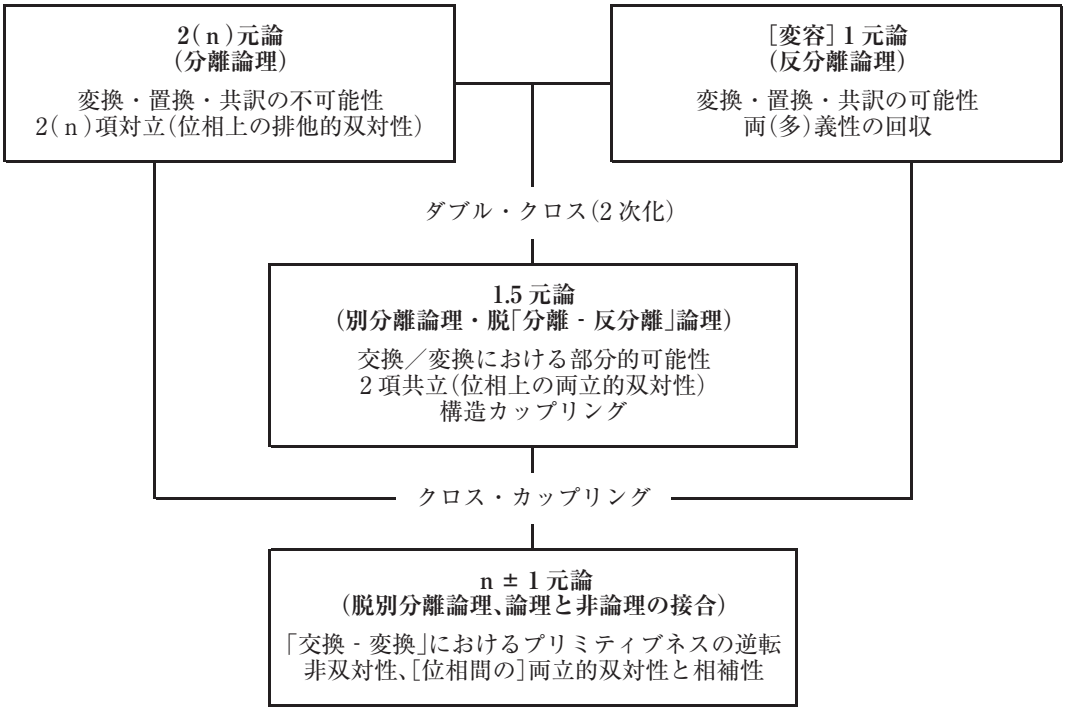
(33) G．ドゥールズ・F．ガタリ／宇野邦一ほか訳，2010年，15～61頁。以上のリゾーム性を，脱官僚主義だとは単に考えない。

近（遼遠，至近）」／「存在接続様相 - 認識接続様相」の，論理$_1$と論理$_2$である（図2）。

論理$_1$には，まず，「科学的」・「物理的$_1$」――時空因果的世界について斉合的でまずまず十全な記述や説明ができていることに欠かせぬ部分[34]――や，「物理的$_2$」――無機（無生物）的過程の説明／予測の原理を構成するのに，そして有機的生命現象について創発主義が不要な範囲ではさらに生物学上諸現象の説明／予測／予期の原理を構成するのにも，十分な類の諸概念や諸法則であるということ[35]――による［変容］1元論の反分離論理がある。なお，予測には誤差があるが，予期にはカオスの縁がある。また，あらゆることが物理の言葉で説明しきれるわけではないという2（n）元論の分離論理がある。2とはいっても選択変項であるから，位相化のズレは様々な2やn（≧3）ももたらす。この分離論理は，これを通過するつぎの論理$_2$にとっては必要な「裂目をもたらす敵」なのである。

論理$_2$には，1.5元論の別分離論理・脱「分離 - 反分離」論理があるが，3人称因果論的には還元可能だが1人称存在論（認識論）的には還元不可能であるあるいはその逆であるという2様を，部分的可能性として捉え交換が発生することによる両立をいう。生物学的特質を自然とは別物とするのではなく自然の中に位置づけるというとき，たとえば，環境に「相即」――これも「斉合」も英語ではcoherence――する身体が紛れもなく先の2様の前者であり物理$_2$に収まるか否かが，後稿での補助線の引き方に絡む。論理$_1$の物理$_1$は「無機

図2　{（1元論あるいは2元論へ）からの2次化} のそして



(34) Feigl, H., 1967, p. 10. なお，彼は心身同一説論者である。

(35) Feigl, H., 1967, p. 10. 傍点部は筆者加筆。

／因果」であり物理$_2$は「『無機 - 有機』／因果」であり，論理$_2$は「『無機 - 有機』／因果」と「有機／非因果」であるが，これらの残余にある「無機／非因果」（無生物の生命）の探求的取り扱いが両者にとって無関係ではないのである[36]。

各項の「起点（初期状態）- 過程（⊃現在）- 終点（終期状態）」において，相互に「介入 - 被介入」／「成功 - 失敗」という状態がある（になる）ところのAPS間カップリングを「構造カップリング」という。たとえば，「資本 - 国家」の2項および「資本 - 国家 - 消費者」の3項によってもたとえられる[37]。この2項のクラス$_2$には国家独占資本とこの対極の「資本独占国家」といういい［のもの］も入り，この3項のクラス$_2$の重合には「『国家 - 資本』」独占」といういい［のもの］も入る。その2項および3項にしてみても，いずれもが少なくともマーケティングの政治経済フレームワーク[38]では「売り手／買い手」である。そして，こういったにせよ，つぎと同然である。法上の「人定（人為）- 自然（どこにでも顕現する同一なものという普遍，人定にはない不変）」で人定寄りな「主権」の意味にある「対内統治性 - 対外独立性 - 最高決定性」という3志向の周知な混在である。以上や，社会生物学ではいわれなかった「中立選択」を踏まえると，物理学であった複雑系論が，社会科学に原基化できるというよりは，「自然科学$_2$ - 社会科学$_2$」に原基化した方がいいという再解釈がでてくる。

このような構造カップリングを2元論的に解せば，たちどころに「入出力のなさ - カップリング」のパラドクスが生じる。そこで，APSを1.5元論的に解し，APS間の関係という「弱い全体性」を導入するホーリスティック構成が考えられる。また，自己延長モデル，自己境界限定化モデルに登場するそれぞれの中心に対する脱2中心モデルは，場［所］という存在を介在させた[39]。これは，唯物論的実在論である中性（立）1元論が第3項（媒介項）を探求し観念論である性質2元論を還元しようとしたかのようにひとまずは，思惟法則から実在法則へと西田哲学を超えようとした。ともかく，有性のこの場［所］を1.5元論の場だとすることから，論理$_1$を脱した先に進むのである。なお，標準論理由来のクリティシズムは，論理$_1$としてクリティカル$_1$である。これに対し，観念論的1元論か唯物論的1元論かという由来からの弁証法も，構造主義かポスト構造主義かという由来からのプラグマティズムの帰結といわれた脱構築[40]も，それらのクリティシズムは論理$_2$としてクリティカル$_2$である。そしてすでに，合（n + 1）をいえば差延（n − 1）をいうこの両者間の差異に加え，対話寄りと会話[41]寄りの差異がいわれる。「場依存的 - 場所普遍的」な実用論理として，標準論理への懐疑主義とここから一歩踏み出したプラグマティズムへの言及がある[42]。これは，会話が包摂する「対話の中心」にある論理$_1$との比較で，法的手続きへの言及から入

(36) R. ローティ／野家啓一監訳，1993年，67 ～ 136頁，181 ～ 239頁。以上を手掛かりとする。彼は，D. デイビッドソンと比較しつつ，「心身同一性なしの唯物論」に言及している。また，ファイグルと本論でのＸ１やＸ２という用語法に今はあるズレも消える可能性がある。

(37) あるいは三権分立の三権という3項にもいえる。

(38) Stern, L. W. and T. Reve, 1980, p. 54.

(39) 清水博，1995年，3 ～ 65頁。

(40) A. バーマン／立崎秀和訳，1993年，425 ～ 524頁。R. ローティ／野家啓一監訳，1993年。ネオ・プラグマティズムといわれる転回には，哲学と科学の形式区分を超えようとしたものがある。以上に基づく。

(41) M. オークショット／嶋津格ほか訳，2013年，237 ～ 300頁。

(42) S. トゥールミン／戸田山和久・福澤一吉訳，2011年。

るが,「対話の残余」の中心になる論理$_2$を孕んでしまっていると考える。そして，1.5元論の擬制に導入する弱い全体性の働きを「実りある - ない」／「一致 - 不一致」に探り，共訳化を全面放棄する相対主義の相対化を回避する。つまり,「肯定する - 肯定も否定もしない（ただし「分かっているどちらでもなさ」）- 否定する」／「共訳不可能 -［部分的に］共訳可能」における「肯定も否定もしない／共訳不可能」ではなく,「肯定する／［部分的に］共訳可能」と「肯定も否定もしない -［部分的に］共訳可能」を真っ先に取り出し合うわけである。ところで，様相には,「可能 - 現実 - 必然」という存在接続様相と,「構造 - 現象 - 解釈」という認識接続様相がある。これについてもいえば,「存在接続／認識接続」という各系列内で3点動化がある様相のいずれに定位するかが決まると，その様相と3次元上で同一平面（地平）にある様相が項化し，2次化Ⅱになる――本論は4次元空間以上の状態図には言及しない――。ということが,「行為 - 制度」パラドクス[43]の以後にまずある別分離に相当する。

そして以上から，脱別分離論理に向かう。4転回後にこそ問われている［間］主体性への問いは，本論前稿と本稿次節までにいったことからすれば，つぎへの問いとなる。すなわち,「ホロン - クリナメン - プラトー」(「ホロン／クリナメン／プラトー」）にもある,「完了形自己（主語，ノエマ[44]）- 進行形自己（述語，ノエシス）」／「客我（組織内の人間としての自我）- 主我（それ以外の自我）」の「良設定（限定的な確定性関係）- 不良設定（無限定的な不確定性関係）」という問題である。存在の有様に強弱の変化をもたらす様相子が付加されたことによる個体（individuals）論論争とのかかわりは後稿で展開するが，この問題解決としては，論理$_1$と論理$_2$の2元論にならない構成が必要条件になる。

まずは，A（B）の内部に於いて，その一部としてあるB（A）が，その内部にA（B）の「弱全体」化としてA´（B´）を生成する[45]，ということがなんとも自然で単純なことだとして，ここに規律権力の装置や生権力の安全装置のガバナンス[46]を代入したり，一方でそうした社会や自然を代入して思えるかなのである。そして，後述のトランスベクションにすらかかわるが，開かれておそろしくなめらかな社会がいわれるようになる。どれもが死の訪れまで決して全部ではない自，他，我々，皆の全体をいうホーリズム・弱全体論では，上記の「AからかBからか」をいうときには，2重性のある大小（「大$_2$ - 小$_2$」）関係の変化（逆転）における「離散・散逸$_2$ - 収斂$_2$」[47]に入る「空」が境界をつくりなおすという考え方がある。また，コト的関係性では，［純粋なシミュラークルのような］シミュレーションの段階そして何らかの機能具現化であるインプレメンテーション（モノ的にはアセンブルやパッケージング）の段階ごとに，境界デマケーショが起きるとも考える。スペンサー＝ブラウンを乗り継いだヴァレラのAPSは同心円的フラクタルのつぎの段階のフラクタルをいったが，さらにつぎの段階への言及がすでにいくつかある[48]。ただし，たとえ2重性があっても大小関係にあるAとBを同一レベル視すれば，4性の「自己 - 他己」の間の大小

(43) L.ヴィトゲンシュタイン／丘沢静也訳，2013年，155～156頁。S. A. クリプキ／黒崎宏訳，1983年。1～219頁。
(44) E. フッサール／渡辺二郎訳，1979年。
(45) Wiley, N., 1988, pp. 254-261. 以上に基づく。
(46) M. フーコー／高桑和巳訳，2007年，3～109頁。
(47) S. Camazine and et al., 2003.　以上は，これを生物学的に言及している。
(48) 中沢新一，1988年，17～36頁。郡司ペギオ - 幸夫，2010年，128～140頁。

関係にも射映し，論理$_2$におけるパラドクスとなる。

こういうことから，つぎの諸領域での「理論 - 実践」に言及する。トランスベクション（交互変換系列）論[49]――サプライチェーンは汎用能記になったが，これはマーケティング論由来の能記――を踏まえると，商品[50]別の「交変系系列」ないしそれら接続連関の特定スケールである交変系における商取引行為の対象区分として，「『モノ$_1$ - コト$_1$』- 『モノ$_2$ - コト$_2$』」／「『交換$_1$ - 変換$_1$』- 『交換$_2$ - 変換$_2$』」といった交差領域が考えられる。商取引行為の核心は，一定の雰囲気の中でまずは積集合にあるベキ集合を介し，現実的諸条件から課題となる諸条件を意味として意味順位に加えることであり，意義を表現することである。このとき，巷間に，本論これまでの存在論寄りのいいに違和感があるようでも「神は細部に宿る」といわれてきたことに比せば，one（all）for one（all），one（all）for all（one）という認識論寄りのいいが違和感なく頻出していることは面白い。また，「起点（初期状態）- 過程（⊃現在）- 終点（終期状態）」の過程にはあるようではあっても起点と終点に自由意志がないといわれる場合以外も，組織個体についてはむしろ考える。付合契約締結の事前事後を含む商取引行為過程とそれ以外の商取引行為過程には，同一視できない権力の遍歴があるからである。ともかく，「過程（⊃現在）」には，つぎがある。①過去（未来）は過去（未来）というごときマルコフ過程，②過去（未来）が未来（過去）を選んでいるというごとき過程。そして，「かけがえを求める（スポット）- 求めない（非スポット）」[51]／「制限合理性の強化 - 非強化」が，マーケティング・チャネル過程における関係性の選択論理前提として摺りかわる。

サービス・ドミナント・ロジック（SDL）[52]がいうグッズ・ドミナント・ロジック（GDL）における“goods”や“services”は，「グッズ$_1$ - サービス$_1$」に相当する。GDLを包摂するSDLにおける“service”は“goods（services）なるservices（goods）”であるから“good”と能記してもいいわけであり，「グッズ$_2$ - サービス$_2$」に相当する。そして，SDLでは，GDL上でservicesのベースになるといわれてきた変換された「もの／人」は，SDL上では流通システム（⊂交換システム）であるとされ，有形財特性であるオペランド資源と無形財特性であるオペラント資源との関係性における一方が強調されているわけである。

たとえば図3のように，再参入させてみよう。というのは，グッズとサービスをモノとコト――「日常 - 非日常」／「至近 - 遼遠」／「高文脈 - 低文脈」といった選択変項が再参入するものだが――に単に対応させるようでは，SDLの真意が隠蔽されると慮るからである。ここからは，モノ$_1$ - コト$_1$，モノ$_2$ - コト$_2$ということになる。一方，同図に入れる能記を，交換――「時間 - 場所」効用を生むソーティングの4区分がある――と変換（⊃変形）――形態効用を生むシェイピングとフィッティング等が実践上で再参入する――に，再参入させる能記を時間と場所に置換すれば，ここからは，交換$_1$ - 変換$_1$，交換$_2$ - 変換$_2$ということになる。ただし，効用は，「時間 - 場所」$_2$にある［物質（そのエネルギー）の］形態に還元される面（物理$_1$，物理$_2$）と，生物学的な物質のパターン創造のように形態に還

(49) 猿渡敏公，1984年，315～339頁。同，1886年，251～267頁。

(50) 以下では「生産あり - なし」／「流通あり - なし」による製品［以前］の捉え方に基づき言及している。ここで，生産は変換，流通は交換に置換できる。長谷川博，2007年，134～143頁。

(51) Williamson, O. E., 1979, pp. 239-240. 彼がいう機会主義は前者である。

(52) Rush, F. R. and S. L. Vargo, 2006. Rush, F. R. and S. L. Vargo, 2014.

図3　モノ$_1$ - コト$_1$，モノ$_2$ - コト$_2$

		モノ		コト	
		グッズ	サービス	グッズ	サービス
モノ	グッズ	モノ$_1$		モノ$_2$	
	サービス				
コト	グッズ	コト$_2$		コト$_1$	
	サービス				

元されない面（未然の物理$_2$など）がある。

「モノ - コト」／「グッズ - サービス」／「交換 - 変換」／「時間効用 - 場所効用」においては，どれにどれを再参入させても，相互の意味のズレに生じる意味があれば，そのそれぞれは特恵的ではないとなる。ゆえに，「モノ$_2$ - コト$_2$」／「交換$_2$ - 変換$_2$」などという交差領域にある実践を，「行為 - 制度」パラドクス以後の「ハイパー実践」と呼んでおこう。

おわりに

言表上で「1.5元論（すべてが中間領域であるときの「裂目のなさ」）のそして」がいいたければ，何らか2項を一度にいうような表現を，遠慮なくあちこちに書いてしまうものか。それでも，このようなディスポジションのテクストには，読者によってそれは応答が異なるものでしょう。

これよりは，つぎに言及する。①「環 - 界」パラドクス，②洗練された機能主義，③様相子付加による個体論論争とのかかわりなどでの主体が主体になること。そして④「ハイパー実践としての商取引」という行為の観点を付加したマーケティング組織個体。弱全体というのは，その中の誰彼なくいえば多変項クロス集計の対角線直近傍セルのそこかしこをみているという意味で2次化Ⅲむしろ Ⅳになっている集合体である。ついては，つぎが少なくともSLMS化にかかわる。①「強全体 - 弱全体」／「スケール相関 - 無相関」，②双対性（排他的双対，両立的双対，そして相補性）と非双対性の入れ替わりのありなし。③間主体性行為の整合レベルと斉合レベル。

＊本稿は，日本経営診断学会関東部会（2016年7月16日，於千葉商科大学市川キャンパス）における筆者の第3報告「社会交変換論Ⅴ：4転回後の含意」を内含する。

［引用参考文献］

Ansoff, H., 1978, *Strategic Management*, The Macmillan Press.（H. I. アンゾフ／中村元一訳，1980年，『戦略経営論』産業能率大学出版部）

Aradhna, K., 2012, “An Integrative Review of Sensory Marketing: Engaging the Senses to Affect Perception, Judgment and Behavior,” *Journal of Consumer Psychology*, 22(3),

pp. 332-351.
Chandler, Jr., A. D., 1962, *Strategy and Structure：Chapters in the History of the Industrial Enterprise*, MIT Press.（三菱経済研究所訳, 1967年,『経営戦略と組織： 米国企業の事業部制成立史』実業之日本社）
Feigl, H., 1967, *The "Mental" and the "Physical"：The Essay and a Postscript*. University of Minnesota.（H. ファイグル／伊藤笏康・萩野弘之訳, 1989年,『こころともの』勁草書房）
Floride, l., 2004, "A Defense of（Informational Structural Realism," *Synthese*, 161（2）, pp. 219-253.
Korzybski, A., 1995, *Science and Sanity: An Introduction to Non-Aristotelian systems and General Semantics*, Institute of General Semantics.
Rizzolatti, G., 2004, "The Mirror-Neuron System," *Annual Review of Neuroscience*, 17, pp. 169-192.
Rush, R. F. and S. L. Vargo, 2006, *The Service-Dominant Logic of Marketing: Dialog, Debate, and Directions*, Routledge.
Rush, F. R. and S. L. Vargo, 2014, *Service- Dominant Logic: Premises, Perspectives, Possibilities*, Cambridge University Press.
S. Camazine and et. al., 2003, *Self-Organization in Biological Systems*, Princeton University Press.（S. カマジンほか／松本忠夫・三中信宏訳, 2001年,『生物にとって自己組織化とは何か：群れ形成のメカニズム』海游舎。初版の訳書である）
Stern, L. W. and T. Reve, 1980, "Distribution Cannels as a Political Economies: A Framework for Comparative Analysis,"*Journal of Marketing*, 44, summer, pp. 52-64.
Wiley, N., 1988, "The Micro-Macro Problem in Social Theory," *Sociological Theory*, 6（2）, pp. 254-261.
Williamson, O. E., 1979, "Transaction - Cost Economics: The Goverance of Contractual Relations," *The Journal of Low and Economics*, 22（2）. pp. 239-240.
A. セン／鈴村興太郎訳, 1988年,『福祉の経済学：財と潜在能力』岩波書店。
A. セン／池本幸生訳, 2011年,『正義のアイデア』明石書店。
A. バーマン／立崎秀和訳, 1993年, ニュー・クリティシズムからの脱構築：アメリカにおける構造主義とポスト構造主義の受容』未來社。
A. N. ホワイトヘッド･B. ラッセル／岡本賢吾ほか訳, 1988年,『プリンキピア･マテマティカ序論』哲学書房。
B. ラッセル／高村夏輝訳, 2007年,『論理的原子論の哲学』筑摩書房。
B. リベット／下條伸輔訳, 2005年,『マインド・タイム：脳と意識の時間』岩波書店。
C. パース／内田種臣編訳, 1986年,『パース著作集2　記号学』勁草書房。
Ch. W. モリス／内田種臣・小林昭世訳, 1988年,『記号理論の基礎』勁草書房。
D. J. チャーマーズ／林一訳, 2001年,『意識する心:脳と精神の根本理論を求めて』白揚社。
D. デイヴィドソン／野本和幸ほか訳, 1991年,『真理と解釈』勁草書房。
D. デイヴィドソン／清塚邦彦ほか訳, 2007年,『主観的, 間主観的, 客観的』春秋社。
E. シュレーディンガー／岡小天・鎮目恭夫訳2008年,『生命とは何か：物理的にみた生細

胞』岩波書店。
E. フッサール／渡辺二郎訳，1979年，『イデーン Ⅰ - 1』みすず書房。
F. ヴァレラほか／田中靖夫訳，2001年，『身体化された心：仏教思想からのエナクティブ・アプローチ』工作舎。
G. スペンサー＝？ブラウン／山口昌哉監訳，1987年，『形式の法則』朝日出版社。
G. ドゥールズ・F. ガタリ／宇野邦一ほか訳，2010年，『千のプラトー：資本主義と分裂症』河出書房新社。
G. フレーゲ／土屋俊訳，1986年，「意義と意味について」坂本百大編『現代哲学基本論文集Ⅰ』勁草書房。
H. パトナム／藤田晋吾・中村正利訳，2006年，『事実／価値二分法の崩壊』法政大学出版局。
J. カラー／富山太佳夫・折島正司訳，2009年，『新版 デコンストラクションⅠ』岩波書店。
J. デリダ／林好雄訳，2005年，『声と現象』筑摩書房。
J. ホフマイヤー／松野孝一郎・高原美規訳，1989年，『生命記号論』青土社。
J. ボードリヤール／竹原あき子訳，1984年，『シミュラークルとシミュレーション』法政大学出版局。
K. J. アロー／長名寛明訳，2013年，『社会的選択と個人的評価』，勁草書房。
L. ヴィトゲンシュタイン／丘沢静也訳，2013年，『哲学探究』岩波書店。
M. オークショット／嶋津格ほか訳，2013年，『［増補版］政治における合理主義』勁草書房。
M. フーコー／渡辺守章訳，1986年，『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社。
M. フーコー／小林康夫ほか訳，2006年，『フーコー・コレクション4 権力・監禁』筑摩書房。
M. フーコー／高桑和巳訳，2007年，『安全 領土 人口』筑摩書房。
M. メルロ＝ポンティ／滝浦静雄・木田元訳，1964年，『行動の構造』みすず書房。
R. ハイス／加藤尚武訳，1970年，『弁証法の本質と諸形態』未来社。
R. バルト／渡辺淳・沢村昂一訳，1971年，『零度のエクリチュール』みすず書房。
R. ローティ／野家啓一監訳，1993年，『哲学と自然の鏡』産業図書。
R. ファイファー・J. ボンガード／細田耕・石黒章夫訳，2007年『知能の原理：身体性に基づく構成論的アプローチ』共立出版。
S. A. クリプキ／黒崎宏訳，1983年，『ウィトゲンシュタインのパラドックス：規則・詩的言語・他人の心』産業図書。
S. A. クリプキ／八木沢敬・野家啓一訳，1985年，『名指しと必然性』産業図書。
S. トゥールミン／戸田山和久・福澤一吉訳，2011年，『論議の技法：トゥールミンモデルの原点』東京図書。
J. R. サール／山崎貴光・吉川浩満訳，2006年，『MIND マインド：心の哲学』朝日出版社。
W. V. O. クワイン／飯田隆訳，1992年，『論理的観点から：論理と哲学をめぐる九章』勁草書房。
阿部周造，2013年，『消費者行動研究と方法』千倉書房。
大澤真幸，1994年，『生命システムの思想』岩波書店。
郡司ペギオ - 幸夫，2010年，『生命壱号：おそろしく単純な生命モデル』青土社。
佐伯胖，1980年，『「きめ方」の論理：社会的決定理論への招待』東京大学出版会。
猿渡敏公，1984年，「マーケティングにおける交換概念の一考察：Aldersonの『交換論理』

について」,『明大商学論叢』66（5-6-7），315 ～ 339 頁。
猿渡敏公，1886 年,「Aldersonのマーケティング理論の性格について」『明大商学論叢』68（3-7），251 ～ 267 頁。
清水博，1995 年,「情報を捉えなおす：場所の研究シリーズ」『HOLONICS』5（1），3 ～ 65 頁。
中沢新一，1988 年,『雪片曲線論』中央公論新社。
永井均ほか，2010 年,『＜私＞の哲学を哲学する』講談社。
長谷川博，2007 年,「製品政策」中央職業能力開発協会編『マーケティング 3 級』社会保険研究所，134 ～ 167 頁。
長谷川博，2016 年,「社会交変換論Ⅴ：連関（2・前提と諸論点）」『Policy Studies Review』No.41，41 ～ 60 頁。
丸山圭三郎，1981 年,『ソシュールの思想』岩波書店。

（2017.1.23 受稿，2017.2.20 受理）